

The logo consists of a large outer rectangle and a smaller inner rectangle. The text "AALA NEWS" is centered within the inner rectangle.

AALA NEWS

Asian American Literature Association, Japan

July 2024 No. 64

- ◎ *AALA News* 第 64 号では、2023 年度の例会の報告および発表要旨をお届けします。2022 年度に続き、2023 年度の例会についても、ほとんどが Zoom を利用したオンライン開催（一部対面とオンラインを併用したハイフレックス開催）となりました。今後の例会発表について、企画案やご要望がございましたら、随時事務局までご連絡ください。
- ◎ AALA35 周年記念国際フォーラム(AALA35th Anniversary International Forum)のテーマは、「アジア系トランスボーダー文学と（ポスト・）コロニアリズム」(“Transborder Asian Literature and Post-Colonialism”)です。2023 年 9 月 21 日・22 日の二日間にわたって、神戸大学六甲台第 2 キャンパスで開催されます。基調講演者として、Rutgers University の Prof. Martin F. Manalansan IV をお迎えするほか、国内外からゲスト・スピーカーも参加予定ですので、どうぞ奮ってご参加ください。後日、会員・関係者の方々には、紙媒体のプログラム・ポスターを郵送させていただきます。非会員の参加も歓迎しますので、ご所属の大学・学会などでご宣伝いただけると幸いです。

(文責：松本)

例会報告要旨

◇第148回例会（2022年6月17日、Zoomを利用したウェブ開催）

ミニシンポジウム

映像作品の中のトランスボーダーネス——21世紀初頭のアジア系（アメリカ）映画を中心に

家父長制への挑戦——『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』における
カンフーとカインドネス

渡邊真理香（北九州市立大学）

『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』（*Everything Everywhere All at Once*, 以下『エブエブ』）は、主人公エヴリン・ワンのとある一日を描いた映画である。2023年のアカデミー賞では、11部門にノミネートされ、作品賞や主演女優賞を含む7部門で最優秀賞に輝いた。

この映画はマルチバース（multiverse, 多元宇宙）設定を用いた一種のSFである。エヴリンは別宇宙に存在する数多の自分にアクセスすることで、彼女たちの能力や特技を自分にダウンロードし、全宇宙を滅ぼそうとする巨悪と戦う、というのが簡単なあらすじである。一方で、この映画は王道のアジア系アメリカ人家族を描いた作品でもある。本発表では、アジア系コミュニティに未だ根強い家父長制に対する本作品のメッセージを考察した。

幼い頃から父ゴンゴンの支配下にあったエヴリンは、いつもゴンゴンの顔色を窺いながら暮らしている。だが、マルチバースを股にかける戦いは、エヴリンに「そうであったかもしれない自分」と繋がることを可能にする。平凡な中年女性エヴリンが、自分の持っている可能性の大きさに目覚めるという意味で、『エブエブ』はフェミニズム的にエンパワリングな作品であると言える。

エヴリンの夫ウェイモンドにも、家父長的価値観に抗う本作品のメッセージを読み取ることができる。アジア系男性の表象をめぐっては、マスキュリティの問題が議論されてきた。本作において重要な「カインドネス」の精神を標榜するウェイモンドは、非男性的あるいは女性的な人物として存在しているが、それはネガティブな表象というよりはむしろ、西洋的男性性への執着から脱したアジア系男性表象であると言える。また、ゴンゴンとは異なり、同性愛に対する偏見を持っていないことで、異性愛主義的価値観を有していない。総じて、ウェイモンドは家父長制の枠外に存在する人物なのである。

以上のように、『エブエブ』では、主人公の女性が戦いの中で自分自身の無限の可能性への気づきに至り、父親からの精神的支配を打ち破るというフェミニズム的な作品である。また、家父長的規範から自由なウェイモンドの存在も、本作品の反家父長的態度を後押ししているのである。

Crazy Rich Asians におけるジェンダー表象——小説と映画の相違について

古木圭子 (奈良大学)

全アジア系キャストによるハリウッド映画として注目を集めた *Crazy Rich Asians* (2018) は、大ヒットを記録した一方、ネガティブな評もある。Mike Ives は、本映画が、シンガポールの中国系のみを描くことで、マイノリティの人びとを無視していると述べ、Mark Tseng-Putterman は、「ウルトラリッチ」な生活というアメリカ版「普遍的美学」を提示することで、「白人の基準に従って」いる点を批判する。しかし、本映画の評価をめぐっては、そのジェンダー表象およびアジア系の人びと、家族間における断絶という要素にも着目する必要もあり、原作小説との比較を試みることで、その問題がより明確になると思われる。

John Lowe は、Miriam M. Johnson の“Strong Mother, Weak Wife”のコンセプトを軸に、母親や祖母の反対に屈することなく、主人公 Nick は「強い妻」になる要素を持つ Rachel をパートナーに選んだと論じている (279)。女性における「母と妻」のコンセプトを分けて考えた場合、「母」は依存者の世話をし、慈しむ役目を担う一方、「妻」は、程度の差はあれ夫に「依存する」存在とみなされる。これは、若くしてニューヨーク大学の教授となった Rachel には当てはまらない。しかし原作小説およびその続編では、映画にみられる彼女の「強い妻」的側面は強調されていない。さらに、三部作に登場する女性たちのキャリアは掘り下げられていない。Rachel が「研究」に従事している姿は、小説ではほとんど描かれないし、Nick の従姉 Astrid は莫大な財産を有し、芸術啓発活動にも関わっているが、彼女の人生は男性（最初は夫の Michael に、その後は恋人の Charlie）に大きく左右される。

小説版がさらに強調するのは、アジア系同士であっても、シンガポールと中国本土の中国系の間には溝があるように、夫婦間、親子間でも亀裂や溝があり、共有できないものが多いということである。そしてそれは、現代に生きる Young 家、Leon 家の人びとのみならず、彼らの祖先の歴史にも遡る。名家の伝統と歴史に傷をつけないように、絶やさないようにという意識が彼らを縛り付け、それに抵抗を試みようとする Nick、その流れを変えるべく Young 家に加わる Rachel にも影響を及ぼす可能性もある。

映画『クレイジー・リッチ・アジアーズ』が、アジア系アメリカの人びとで共有され、長らくメディアでその存在を主張できずにいたアジア系俳優、監督に、表現の場所が与えられたことは喜ばしい。しかし、アジアの中にも多様性があることを今後主張できるようなメディアであってほしいと願う。

フラジャイル・アメリカ——クロエ・ジャオ『ノマドランド』とナルシスティック・ランド スケープ

塚田幸光 (関西学院大学)

ロード・ムービーとは何か。そして、それは何を描くのか。かつての『怒りの葡萄』、或いはフィルム・ノワールからニューシネマに至るまで、アメリカン・ロードは「死」の別名だった。

だが、そのような「死」のトポスは、1980年代を経て「和解」と「再生」の物語へと書き換えられる。ならば、クロエ・ジャオの『ノマドランド』(Nomadland, 2021年)は、如何なる物語として考えることができるだろうか。本発表では、『ノマドランド』を軸に、「白い」アメリカン・ロードの意味を再考した。〈現代のノマド=放浪の民〉として、季節労働の現場を渡り歩くファーン(F・マクドーマンド)の旅路は、現代アメリカの如何なる姿を代弁し、何を映し出すのか。アジア系に限らず、有色人種が殆ど出てこない「白い」アメリカ。それを撮る中国出身の監督クロエ・ジャオ。アジアが見つめるハートランドには一体何が映るのか。

ジョン・フォード的な「二重フレーム」に顕著のように、『ノマドランド』では、大自然に対する「内」と「外」、或いは広い(開放)と狭い(閉鎖)は等価に描かれる。ファーンは、大自然のなかに歩を進めるが、バンという「殻」からなかなか出てこない。この「広いと狭い」の共存、等価の感覚は、自然への幸福な回帰という楽観主義と、文明からの孤立と排除という悲観主義、どちらかのステロタイプに陥るのを回避する。興味深いことに、このような風景の両義性は、搾取に対する描かれ方にも接続する。『ノマドランド』には、アマゾンによる搾取の風景が頻出するが、それに対するノマドの「依存」も強固である。エンパイアの鉱山とアマゾンの倉庫、実際にはどちらも変わらない。この両義性を示し、現状に対する喪失と可能性、或いは自由と孤独を同時に提示している点が重要だろう。

ファーンの立場は、主流白人ではなく、むしろ移民やアジア系やネイティブアメリカンの社会的立場に近い。『ノマドランド』の原作者ブルーダーは、白人ノマドの悲劇を描いた。だが、それをジャオが映像化するとき、彼女はファーンに、「移民」的エスニシティを付与し、「白さ」から距離を置く。結果として、彼女は複数のエスニシティを代弁し、その涙の道を進むことで、悲劇を二重化して見せる。『ノマドランド』には、有色人種が殆ど出てこない。だが、そこにはアメリカ映画が削除し続けるエスニシティの不都合な真実と、脆弱なアメリカの姿が見えてくるはずだ。

◇第149回例会(2023年7月28日、対面(神戸大学)とZoomを併用したハイフレックス開催) 【Special Lecture】

“New Wonders of A Nonbinary Universe: Gender and Genre Questions of Science Fiction”

Prof. Mingwei Song (Wellesley College USA, President of ACCL)

Guest Commentator: TATSUMI Takayuki (巽孝之) (Keio Univ.)

Discussant: PARK Junghwan (Graduate Student, Kobe Univ.)

Moderator: YAMAMOTO Hideyuki (山本秀行) (Kobe Univ.)

Organizer: MAHADA Maya (濱田麻矢) (Kobe Univ.)

*基盤研究(B)「アジア系トランスボーダー文学」の包括的研究枠組創成と世界的研究ネットワーク構築(代表者:山本秀行)および、基盤研究(B)「方法としてのサイノフォン:華語語系文学史構築のための基礎研究」(代表者:濱田麻矢)の共同企画です。

中国SF研究の第一人者である米国 Wellesley College の Prof. Mingwei Song (President of ACCL) による“New Wonders of A Nonbinary Universe: Gender and Genre Questions of Science Fiction”というタイトルの講演の後、ゲスト・コメンテーターとしてお招きした巽孝之先生（慶應義塾大学名誉教授、慶應ニューヨーク学院長）、および、PARK Junghwan (神戸大学大学院人文学研究科大学院生) さんがディスカッサントを務めた例会が、ハイフレックス開催 (in-person and online) された。Prof. Song の近著 *Fear of Seeing: A Poetics of Chinese Science Fiction*. (Columbia UP, 2023) の内容を中心とした講演の後、ゲスト・コメンテーターの巽先生から、SF 文学史から中国系 SF の特徴についての再定義を求める質問などがあり、講演の内容が一層深まった。また、ディスカッサントの PARK さんが、韓国系 SF 作品 Bo-Young Kim, *How Alike Are We*(2018) についての紹介を行い、その後、Prof. Song と巽先生のコメントにより、この作品の読解を通して、アジア系 SF の新しい潮流が浮き彫りになった。

なお、特別講師の Prof. Mingwei Song のプロフィールは以下の通り。

Prof. Song studied at Shandong University, Fudan University, and Columbia University where he earned his Ph.D. He is professor at Wellesley College (Chinese and Comparative Literature), and the President of ACCL (Association of Chinese and Comparative Literature). Prof. Song’s major publications include: *Young China: National Rejuvenation and the Bildungsroman, 1900–1959* (Harvard UP, 2016) and *Fear of Seeing: A Poetics of Chinese Science Fiction* (Columbia UP, 2023).

(報告：山本秀行)

◇第 150 回例会 (2023 年 11 月 28 日、対面 (神戸大学) と Zoom を併用したハイフレックス開催) 特別講演 [Special Lecture]

Prof. Dorothy J. Wang (Williams College USA)

“Re-thinking the ‘English’ in English Literature through Anglophone Asian Writing”

発表 [Presentation]

Sophia H. Dickey (Graduate Student, Fukuoka Women’s University)

“Blurred Lines: Shifts Between ‘Remembering’ and ‘Forgetting’ in Juliet S. Kono’s *Anshū: Dark Sorrow*”

※「特別講演」は、基盤研究 (B) : 「アジア系トランスボーダー文学」の包括的研究枠組創成と世界的研究ネットワーク構築 (代表者：山本秀行) の助成を受けています。

特別講演: “Re-thinking the ‘English’ in English Literature through Anglophone Asian Writing”

Prof. Dorothy J. Wang (Williams College USA)

Thinking Its Presence: Form, Race, and Subjectivity in Contemporary Asian American Poetry (Stanford University Press, 2013) の著者である米国 Williams College 教授 Prof. Dorothy J. Wang が、講演の表題にあるように、英語で書かれたアジア系文学 (詩・韻文) を通して、英文学 (英語文学) における「英語」の意味を再考するという非常に興味深い講演だった。その後、フロア (in-person and online) から幾つもの質問が出され、講演の内容の理解がより深まった。

なお、特別講師の Prof. Dorothy Wang のプロフィールは以下の通り。

Dorothy Wang is Professor of American Studies at Williams College, where she spearheaded the founding of Asian American Studies. Her monograph, *Thinking Its Presence: Form, Race, and Subjectivity in Contemporary Asian American Poetry* (Stanford, 2013), won the Association for Asian American Studies’ award for best book of literary criticism in 2016 and made *The New Yorker*’s “The Books We Loved in 2016” list. The only national conference on race and creative writing is named after it. Wang conceived of

and co-founded the Race and Poetry and Poetics in the UK (RAPAPUK) initiative. She has been an ACLS Frederick Burkhardt Fellow.

(報告：山本秀行)

“Blurred Lines: Shifts Between ‘Remembering’ and ‘Forgetting’ in Juliet S. Kono’s *Anshū: Dark Sorrow*”

Sophia H. Dickey (Graduate student, Fukuoka Women’s University)

Juliet S. Kono’s novel *Anshū: Dark Sorrow* (2010) tells the story of Himiko Aoki, a Japanese American girl from Hilo, Hawai’i, as she navigates growing up in Japan amidst the backdrop of World War II. To avoid ostracization in her small community due to her teenage pregnancy, she is forced to move to Japan and adapt to a completely new language, cultures, and landscapes. While in Japan, Himiko ends up becoming caught in the Tokyo firebombing and the atomic bombing of Hiroshima. After she becomes a *hibakusha*, a survivor of the atomic bomb, she chooses to stay in Hiroshima over returning to her family in the U.S. Her complicated position as a Japanese American in WWII, later on being rendered as a Japanese American *hibakusha*, not only offers insight into the reality of those who lived through the war but also disrupts the binary of the victim and perpetrator.

This presentation went over an analysis of the different dimensions of Himiko’s identity and the shifts such dimensions go through by her “remembering” and “forgetting.” One major motif of the text is fire. The ways the protagonist engages with it demonstrate a duality of life-ending and life-sustaining qualities. In some cases, Himiko would wield fire in order to destroy and revel in its destruction; in other cases, she would wield fire as a means of warmth and for conducting spiritual rituals. The ways the qualities of fire would shift and overlap reflect Himiko’s sense of self, illustrating the improbability of marking her as simply “American” or “Japanese.”

This duality is also evident in Himiko’s engagements with her “remembering” and “forgetting.” On the one hand, “remembering” enables Himiko to get in touch with the clashing aspects of her identity. On the other hand, “forgetting” enables her to be released from such aspects. Himiko’s character acts as a vessel that holds oppositional aspects of identity without putting one above the other, exemplifying the hybridity of her identity, as well as her “in-betweeness.”

◇第 151 回例会 (2024 年 1 月 20 日、Zoom を利用したウェブ開催)

【特別講演 (Special Lecture)】

“Japanese Atmospheres and the Pleasure of Belonging: Winnifred Eaton and Sadakichi Hartmann”
(「日本の雰囲気と所属の快樂——ウィニフレッド・イートンとサダキチ・ハートマン」)
講師 (Lecturer) : Prof. Spencer Tricker (Clark University)

コメンテーター (Commentators) :

宇沢美子 (慶應義塾大学) Yoshiko Uzawa (Keio University)

松川祐子（成城大学） Yuko Matsukawa（Seijo University）

【ラウンドテーブル・ディスカッション（Roundtable Discussion）】

“Research on Winnifred Eaton in North America and Japan”

講演者・コメンテーター参加（with Lecturer and Commentators）

司会（Moderator）：松本ユキ（近畿大学） Yuki Matsumoto（Kindai University）

オーガナイザー（Organizer）：山本秀行（神戸大学） Hideyuki Yamamoto（Kobe University）

※このイベントは、基盤研究(B)：「アジア系トランスボーダー文学」の包括的研究枠組創成と世界的研究ネットワーク構築（代表者：山本秀行、研究課題番号：23H00613）の助成を受けています。

例会報告

松本 ユキ（近畿大学）

今回の企画は、2023年度の夏にカナダのカルガリーで開催されたウィニフレッド・イトンの会議に参加した際に、基調講演を行ったスペンサー・トリッカー先生（米国クラーク大学、講師）に学会での講演を依頼したことから始まった。山本秀行先生のご尽力により、AALAの会員である宇沢美子先生（慶應義塾大学）と松川祐子先生（成城大学）にコメンテーターとしてご登壇いただくこととなった。

当日はまず「日本的雰囲気と所属の快樂-ウィニフレッド・イトンとサダキチ・ハートマン」というテーマでスペンサー先生に一時間ほどご講演いただいた。発表においてスペンサー先生は、19世紀末から20世紀にかけて主にアメリカで活躍した二人のユーラシアンのアーティストを比較することで、彼らの実践が当時流行していたジャポニズムの影響を受けつつも、ユーラシアンとしての自身の立ち位置とその所属を表明するものであったことを明らかにされた。イトンとハートマンの作品が日本の言語や文化を正確に捉えたものかどうかはさておき、「日本」という場所の雰囲気を様々な空間的要素の再現や嗅覚によるイメージ喚起などを通じて生み出そうとした彼らの実験的な試みは非常に興味深く、これまでにない独創的なものであったと言える。

講演後、宇沢先生と松川先生よりコメントを頂戴した。事前に講演の原稿を共有していただいたおかげで、講師間で活発な議論をすることができた。その後、「北米と日本におけるウィニフレッド・イトン研究」というテーマでラウンド・ディスカッションを行った。先生方がそれぞれどのような経緯でウィニフレッド・イトンやオリエンタリズムの研究に関われることになったのか、研究当初は情報や資料が限られていたなかでどのように調査を進めていったのか等、普段はあまり聞くことのできないとても貴重なお話を伺うことができた。

最後に質疑応答の時間を設け、参加者からも様々なコメントやご意見、ご質問を頂戴した。特に、ウィニフレッド・イトンのご令孫であり、伝記の著者であるダイアナ・バーチャル氏、そしてウィニフレッド・イトンの研究者であるドミニカ・フェレンス先生にご参加いただいたことにより、非常に有意義な意見交換の場となった。

一月という忙しい時期の例会にもかかわらず、多くの参加者にお集りいただき、時差があるにもかかわらずアメリカやポーランドなど様々な場所からご参加いただいたことは、望外の喜びであった。今後も機会があれば、今回のような会を積極的に開催していきたい。

◇第152回例会（2024年3月9日、Zoomを利用したウェブ開催）

【基調講演／Keynote】

アラン・アイザック（ラトガース大学）／Allan Issac (Rutgers U)

「ディアスポラにおける死とその過程」／“Death and Dying in Diaspora”

【講演／Lecture】

ジョハンナ・ズルエタ（東洋大学）／Johanna Zulueta (Toyo U)

「沖縄の軍事基地建設と混血アイデンティティの創造——砂守勝巳の『沖縄シャウト』との
かかわりから」／“Military Basing in Okinawa and the Creation of Mixed Identities: Engaging with
Sunamori Katsumi’s *Okinawa Shauto*”

【質疑応答 or ラウンド・ディスカッション／Q&A or Round Discussion】

司会&ディスカッサント：牧野理英（日本大学）／Chair&Discussant: Rie Makino (Nihon U)

*このイベントは、基盤研究（B）：「アジア系トランスボーダー文学」の包括的研究枠組創成
と世界的研究ネットワーク構築（代表者：山本秀行、研究課題番号：23H00613）の助成を受
けています。

<Keynote Lecture>

Death and Dying Diaspora

Allan Punzalan Issac (Rutgers University, USA)

Filipino Time: Affective Worlds and Contracted Labor (2022) explores cultural productions around migrant practices that mark other ways of sensing, making sense of, and feeling time with others. Migrant subjects harness time and the imagination in their creative, life-making capacities to make communal worlds out of one steeped in the temporalities and logics of capital. In *Filipino Time*, Isaac examines how contracted service labor performed by Filipinos in the Philippines, Europe, the Middle East, and the United States generates vital affects, multiple networks, and other life-worlds as much as it disrupts and dislocates human relations. Signaling his current research in this talk, Isaac explores live-streamed funeral vigils, a technological practice made necessary by Filipino diasporic life even before the pandemic, to highlight two Tagalog concept-words that map other ways to generate ecologies of communality and presence at a distance: *pakiramdam* (literally, to make oneself felt, or to feel a presence), affective engagement without immediate proximity; and *kapiling*, to be in someone's proximity or vicinity without direct interaction.

<Guest Speaker>

Military Basing in Okinawa and the Creation of Mixed Identities:

Engaging with Sunamori Katsumi’s *Okinawa Shauto*

Johanna O. Zulueta (Toyo University)

The issue of “mixed” race continues to be of crucial significance in Okinawa, the southernmost prefecture of Japan. Host to nearly 70% of U.S. military installations in the country, Okinawa arguably has the largest number of “Amerasians”—offspring of military servicemen and Okinawan women. However, little notice has been given to offspring of intermarriages between Okinawan women and TCNs or third-country nationals hired to work on U.S. military installations on the island during the immediate post-war years. A large number of these so-called TCNs are Filipinos, hired as professionals and semi-skilled workers. This study looks at offspring of Filipino nationals and Okinawan women born in the immediate post-war years.

While most of these TCNs and their Okinawan wives moved to the Philippines after the formers' contracts expired, there were cases wherein the Filipino husband left his Okinawan wife and child in Okinawa, and no contact was ever made upon the husband's return to the Philippines. Hence, there are children of these intermarriages who were born and brought up in Okinawa, and presumably have not experienced setting foot on Philippine soil. Some of them only have vague memories of their father. An illustration of this is *Okinawa Shauto* (Kodansha, 2000), a novel written by an Okinawan-Filipino who travelled to Manila in search of his Filipino father. This study will engage with the novel and its writer as he examines his identity growing up as a person of mixed descent, and travelling to the Philippines to search for part of his identity.

事務局だより

<新入会員の紹介> (敬称略, 順不同)

天野剛至(常葉大学)	林貴哉(武庫川女子大学)
李一旻(神戸大学[院])	三牧史奈(杏林大学)
中村麻美(神戸大学)	Špela DRNOVŠEK ZORKO(神戸大学)
XU Yiran(北京大学)	

<会費納入のお願い>

会員の皆様にはおかれましては、会費を納入いただきましてありがとうございます。*ALA Journal* No.29 を送付の際に、振込用紙を同封させていただいております。もし、未納の方がいらっしゃいましたら、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

<住所等変更について>

住所、所属、メールアドレス等に変更あるいは、事務局に連絡事項がございましたら、会費振り込み票に記入されるだけでなく、ご面倒ですが、事務局までメールでお知らせいただきますようお願い申し上げます。

ALA 事務局メールアドレス: aala.jp.office@gmail.com

<ALA Journalバックナンバー購入のお願い>

ALA Journalバックナンバー(在庫僅少の No.1 を除く)を1部1,000円でお送りしています。会費納入の際に、ご希望の号と冊数を振込用紙の「通信欄」にお書きいただくと簡単です。

<ジャーナルの執筆者負担>

ジャーナルの投稿論文掲載には、従来から、執筆者負担をお願いしています。負担金額に応じてバックナンバーをお送りしています。「文献解題」や「書評」については「論文」の半額、学生会員については、各区分の規定額の半額となります。研究費・校費等で支払いを希望される場合は事務局にご相談ください。

☆会費・執筆者負担等の振込先は以下の通りです(振込料金は振込者負担となります)。

[郵便振替口座番号 01180-1-75183 加入者名 アジア系アメリカ文学会]

アジア系アメリカ文学会
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1
神戸大学人文学研究科山本秀行研究室内
TEL&FAX: 078-803-5543

ALA NEWS No.64 2024年7月4日

編集担当: 松本ユキ